

岩村清太著

アウグスティヌスにおける教育

創文社刊



アウグスティヌスにおける教育

岩村清太 著



創文社

岩村 清太 (いわむら・きよた)

1931 年、長崎県生まれ。広島大学大学院教育学研究科博士課程後期中退、大東文化大学名誉教授
〔著訳書〕『教育原理』（共著、協同出版、1982 年）
『教育思想史』（第 2 巻、共著、東洋館出版社、1984 年）
『西洋教育史』（共著、福村出版、1994 年）；
H.-I. マルー著『古代教育文化史』（共訳、岩波書店、1985 年）
P. リシェ著『中世における教育・文化』（東洋館出版社、1988 年）
P. リシェ著『中世の生活文化誌』（同上、1992 年）

〔アウグスティヌスにおける教育〕

二〇〇一年五月二〇日 第一刷印刷
二〇〇一年五月二五日 第一刷発行

著 者 岩 村 清 太
発 行 者 久 保 井 浩 俊
印 刷 者 岡 本 健 紀

発 行 所 創 文 社

〒100-0001
東京都千代田区麹町二一六―七
電話 〇三・三三六・三七二〇―
振替 〇〇二二〇〇九二四七二

著者との申し合せにより検印省略 クイックス印刷・鈴木製本

ISBN 4-423-17133-3

Printed in Japan

凡 例

一、アウグスティヌスの著作のラテン語原文と、部、章、節などの区分は、Bibliothèque Augustinienne, Oeuvres de saint Augustin, Desclée de Brouwer に拠った。なお、注において著者名のないラテン語文献は、アウグスティヌスの著作である。

二、アウグスティヌスの著作のうち邦訳のあるものは、教文館発行の『アウグスティヌス著作集』（一九七九年以降）における邦訳を、本書の文脈に合わせて利用させていただいた。

一、ただし、『著作集』以外の邦訳を用いたものもある。たとえば、Confessiones は、山田晶訳『告白』『世界の名著 14』中央公論社、一九六八年を、De moribus Ecclesiae catholicae et de moribus manichaeorum の第一巻は、熊沢賢二訳『カトリック教会の道徳』創文社、一九六三年を、De catechizandis rudibus は、熊沢賢二訳『教えの手ほどき』創文社、一九六四年を、De Trinitate は、中沢宣夫訳『三位一体論』東京大学出版会、一九七五年を用いた。さらに、De magistro は、主として石井次郎・三上茂訳『アウグスティヌス教師論』『世界教育字選集』98、明治図書出版、一九八一年を利用させていただいた。

一、なお、注の煩雑さを避けるため、本書第II部第二章では、De magistro（教師論）の引用および参照箇所は本文中に漢数字で括弧内に記入し、第II部第三章でも、De doctrina christiana（『キリスト教の教え』）の引用および参照箇所は（DC）の略記号とともに）本文中に算用数字で括弧内に記入し、また第II部第五章でも Confessiones（『告白』）の引用、参照箇所は括弧内に漢数字で書き入れた。

一、聖書の引用、参照には、新共同訳、一九八七年を用いた。

一、人名については、邦語では通称を用い、欧文ではラテン語の綴りに統一した。

哲学、神学、聖書学、政治学、歴史学などにおけるアウグスティヌス研究はさかんであるが、教育に対するアウグスティヌスの貢献は必ずしも十分な評価を得ているとは言いがたい。しかしアウグスティヌスの生涯を一語で言うとなれば、かれはなによりもまず教師であったと言えるよう。

アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 三四一—四三〇) が生きた時代は、古代から中世への転換期にあたる。約五〇〇年もの間、「ローマの平和」をもって地中海世界を統括したローマ帝国は新支配者ゲルマン諸部族の侵攻によって崩壊しつつあった。一方、それまで雌伏を余儀なくされてきたキリスト教は、権力者の交替と社会の混乱のなかにあつて、ローマ古来の宗教に代わる新たな社会の精神的支柱、ヘレニズム・ローマ文化の庇護者として台頭し、教育を含む古典文化をキリスト教化していく。こうした政治的、社会的、文化的変動を生き、かつ来るべき新時代の取るべき方向を教示した人物をだれかあげるとすれば、アウグスティヌスをおいてほかにはない。かれがち、「西洋の教師」と称されたのも当然のことである。

アウグスティヌスの生涯および活動は、キリスト教への回心を境に二大別される。回心以前のアウグスティヌスは、社会的上昇を願う両親の求めに応じ、教育による栄達を目指した。二〇歳で最高学府の修辞学校を終えたかれは、すぐに故郷のタガステで文法を教えるはじめ、二二歳からはカルタゴ、ローマで修辞学を教えた。そして当時、西ローマ皇帝ヴァレンティニアヌス二世 (Valentinianus II 在位三七五—九二) の御座所であつたミラノの欽定弁

論講座の教師となり、栄達のゴールに達したかに見えたとき、三二歳でキリスト教に回心したのであった。

回心後のアウグスティヌスは、それまで辛苦を重ねて追求してきた立身出世を放棄し、古代弁論学校の教壇を去った。その後かれは、三七歳でヒッポの聖職者に叙せられたあと、七六歳で他界するまで、キリスト教的理念にもとづく「神の国」の建設に挺身したのであった。つまりアウグスティヌスは、回心することによって教育活動を放棄したわけではない。むしろ利己的、個人的栄達を目指す教育から人類の救済をおもう教育へ、世俗的、物質的野心を追求する教育から人間の幸福、キリスト教的ヒューマニズムを標榜する教育へ、自己中心の教育から神中心の教育へと、教育の変革をもたらし、中世以降のヨーロッパの教育が向かうはずの道を身をもって教示したのであった。こうして見ると、かれの回心は、かれ自身の生活だけでなく、かれが生きた世界の時代転換を体现するものであり、古代の教育をキリスト教的教育へと転換させるものであった。

以上の内容をふまえて、本書は不均等ではあるが、三つに大別される。まず序章では、アウグスティヌスが受けた家庭教育、学校教育を取り扱う。ここでは『告白』をもとに、両親から託された立身出世という教育目標、そのために強制された古代の学校教育の実情と、これに対するアウグスティヌスの批判に注目したい。そこではかれが、世俗的野望に駆られながらも、すでに学生生活のなかで不動の真理に向かう力動的上昇を怠らず、人間の究極目的を追求している点に目を向けたい。

次に本論の第一部では、アウグスティヌスの教育活動を取り上げる。かれの教育活動は、回心を機に二分される。一つは世俗的教師としての活動である。そこでかれは、年来の野望の実現をほぼ手中にする。と同時に、野望実現の場となるはずのローマ社会の崩壊と、一方、救いの実現を目指すキリスト教の台頭を目の当りにし、こうした世界の時代転換をまえに自分の生き方を転換し回心する。そしてこの回心後の教育活動こそは、われわれがアウグス

ティヌスについてよりよく知るものであり、また注目すべき部分である。アウグスティヌスは回心から死に至るまで修道者、聖職者として、説教、文筆活動をととして聖職者とくに一般大衆を相手にキリスト教を教え、その教育活動をととして、教育を含むキリスト教思想全体の形成者、西方における最大の教父となっていく。

本論の第Ⅱ部は、アウグスティヌスの教育活動の原理を、三つの視点から取り上げる。第一の視点は、アウグスティヌスによるキリスト教的人間観である。かれは、神の似姿として造られた人間のもつ善さと尊厳を強調する一方、原罪 (*peccatum originale*、この語はアウグスティヌスに由来する) による人間の弱さ、低さを自覚させる。しかしかれの原罪論は恩恵論と一体をなす。キリストの託身によつて示された「神の救いのわざ」(恩恵) は、弱い、低い人間を神との一致、至福の生にまで導く。こうして見ると、アウグスティヌスの言う教育は、このキリストによる「救いのわざ」の延長である。

第二の視点は教授法である。聖職者アウグスティヌスの普段の教授法は説教であり、かれは回心前に教授してきた修辞学ないし雄弁術をもとに説教の在り方を説く。とくに注目したいのは、教授における教師と学習者との関係である。かれによると、両者の接点は、学習者を照らすキリストの照明である。ここでアウグスティヌスは、神と人間とを仲介するキリストの託身の神学をもつて新プラトン主義を越える。教師のことは、教育活動全体は、このキリストによる照明に導くにすぎない。こうしてかれは、教師の権威主義、ことは万能主義を戒め、一方、学習者には照明に対応する内省を求める。

第三の視点は、教授内容である。言うまでもなく、回心後のアウグスティヌスの教授内容は、キリスト教そのものであるが、本書でとくに注目したいのは、古来、異教的文化・教養の基礎として重視されてきた自由学芸に対するアウグスティヌスの態度である。かれは、神の制定によるという自由学芸の神的起源と、神に向かう知的上昇の

一段階であるという自由学芸の神的機能をもとに、神の英知を求めるキリスト教的哲学と、聖書解釈のための基礎教養として、自由学芸をキリスト教のなかに位置づけた。こうしてかれは、従来の教父たちが聖学と俗学、「アテネとエルサレム」というように対立的にとらえてきたキリスト教と異教文化との調和、融合を図り、今日の西欧文化・教養の基礎をすえたのであった。

目次

凡例	v
まえがき	vii
引用著作一覧	xvii
序章 教師アウグステイヌスの形成	三
第一節 アウグステイヌスの家庭と幼児教育	三
第二節 タガステでの読み書き算の学習	八
第三節 マダウラでの文法学習	三
第四節 カルタゴでの弁論学習	六
 第Ⅰ部 アウグステイヌスの教育活動	
第一章 回心前のアウグステイヌスの教育活動	七
第一節 タガステでの文法教授	七
第二節 カルタゴでの弁論教授	三

第三節	ローマでの弁論教授	三
第四節	ミラノでの弁論教授	三
第二章	回心後のアウグスティヌスの共同生活と教育活動	四
第一節	アウグスティヌスの回心と修道生活	四
第二節	カッシキアウムでの共同生活と教育活動	四
第三章	修道者アウグスティヌスの教育活動	五
第一節	ローマ滞在と修道観の発展	五
第二節	タガステでの修道生活と教育活動	五
第四章	聖職者アウグスティヌスの修道生活と教育活動	六
第一節	ヒッポの庭園修道院と聖職者修道院	六
第二節	アウグスティヌスの修道会則における知的教育	六
第三節	ヒッポにおけるアウグスティヌスの著作と教育活動	六
第五章	聖職者アウグスティヌスによる入信者の教育	六
はじめに		六

第一節	洗礼志願者の教育	八三
第二節	洗礼希望者の教育	九二
第三節	新受洗者の教育	一〇三
おわりに		一二五
第六章	聖職者アウグスティヌスの一般信徒への説教	一二八
第一節	教育と説教	一二八
第二節	説教の様式	一二三
第三節	説教の内容	一二八
第四節	説教の文体	一三三
第II部	アウグスティヌスの教育論	
第一章	アウグスティヌスの人間観と教育	一四三
はじめに		一四三
第一節	アウグスティヌスの人間観	一四四
第二節	アウグスティヌスの人間観と教育	一六七
おわりに		一九二

第二章	アウグスティヌスによる教授と学習——『教師論』を中心に	一九六
はじめに		一九六
第一節	種々の教授法	一九八
第二節	教師による教授の在り方	二〇五
第三節	真の教師と真の学習者	二二二
おわりに		二三三
第三章	アウグスティヌスによる教授（説教）法（Ⅰ）	二三五
はじめに		二三五
第一節	アウグスティヌスの教授（説教）法	二三七
第二節	アウグスティヌスの教授（説教）法の特徴と意義	二四三
おわりに		二五〇
第四章	アウグスティヌスによる教授（説教）法（Ⅱ）——バシリカ、絵画・彫刻、歌唱による	二五三
はじめに		二五三
第一節	バシリカ、絵画・彫刻、歌唱による教授	二五四
第二節	バシリカ、絵画・彫刻、歌唱による教授の原理	二六六
おわりに		二七三

第五章	アウグスティヌスによる記憶と学習	二七五
はじめに		二七五
第一節	記憶における記銘・保持と学習	二七六
第二節	記憶における想起と学習	二八六
第三節	アウグスティヌスによる記憶論の特徴	二九三
おわりに		二九八
第六章	アウグスティヌスによる自由学芸と哲学	二九八
はじめに		二九九
第一節	古代ローマにおける自由学芸	三〇〇
第二節	アウグスティヌスによる自由学芸	三〇四
第三節	アウグスティヌスによる自由学芸と哲学	三二三
おわりに		三三〇
第七章	アウグスティヌスによる自由学芸と聖書解釈——『キリスト教の教え』を中心に	三三四
はじめに		三三四
第一節	アウグスティヌスによる聖書解釈	三三六
第二節	自由学芸の聖書解釈への応用	三三一

第三節 自由学芸のキリスト教化	三六
おわりに	三三
補遺 カッシオドルスによる修道生活への自由学芸の導入	三四
はじめに	三七
第一節 政治家カッシオドルスによる文教活動	三八
第二節 カッシオドルスによるキリスト教学校の設置計画と修道院創設	三五
第三節 カッシオドルスの修道院における学習内容	三九
おわりに	三七
あとがき	三七
注	一五
索引	一 一三

引用著作一覧

(刊行年順)

『美と適合』	De pulchro et apto (380)
『アカデミア派駁論』	Contra Academicos (386)
『秩序論』	De ordine (386)
『ソリロキア』	Soliloquia (386-87)
『魂の不滅』	De immortalitate animae (387)
『音楽論』	De musica (387-89)
『魂の偉大』	De quantitate animae (388)
『カトリック教会の道德とマニ教徒の道德』	De moribus ecclesiae catholicae et de moribus manichaeorum (388-89)
『八三の問題集』	De diuersis quaestionibus otoginta tribus (388-89)
『教師論』	De magistro (388-90)
『自由意志論』	De libero arbitrio (388-95)
『創世記についてマニ教徒に答える』	De Genesi aduersus Manichaeos (388-90)
『至福の生』	De beata uita (390)
『真の宗教』	De uera religione (390)
『信の効用』	De utilitate credendi (391-92)
『信仰と信条』	De fide et symbolo (393)
『主の山上の説教』	De sermone Domini in monte (394)
『シンプリキアヌスへ』	Ad Simplicianum (396)
『キリスト教の教え』	De doctrina christiana (396-427)
『ドナトゥス派批判』	Contra partem Donati (397)
『告白』	Confessiones (397-400)
『善の本性』	De natura boni (400)
『教えの手ほどき』	De catechizandis rudibus (400)
『洗礼についてドナトゥス派に与う』	De baptismo contra Donatistas (400)
『修道者の労働』	De opere monachorum (400)
『三位一体論』	De Trinitate (400-21)
『結婚の善』	De bono conjugali (401)
『ペティリアヌスの書簡に答える』	Contra litteras Petilianiani (401-05)
『創世記逐語注解』	De Genesi ad litteram (401-15)
『クレスコニウスを駁す』	Contra Cresconium (405-06)

『罪の報いと赦し、および幼児 洗礼』	De peccatorum meritis et remissione et de baptismo paruulorum (411-12)
『霊と文字』	De spiritu et littera (412)
『自然と恩恵』	De natura et gratia (413-15)
『神の国』	De ciuitate Dei (413-27)
『詩編注解』	Enarrationes in Psalmos (414-18)
『ヨハネによる福音書講解説教』	Tractatus in Joannis Euangelium (414-18)
『ヨハネの書簡講解説教』	Tractatus in epistolam Joannis (416)
『キリストの恩恵と原罪』	De gratia Christi et peccato originali (418)
『結婚と情欲』	De nuptiis et concupiscentia (419-20)
『魂とその起源』	De anima et ejus origine (419-420)
『ペラギウス派の二書簡批判』	Contra duas epistolas Pelagianorum (420)
『エンキリディオン』	Enchiridion (421)
『ユリアヌス批判』	Contra Julianum (421)
『恩恵と自由意志』	De gratia et libero arbitrio (426-27)
『譴責と恩恵』	De correptione et gratia (426-27)
『再考録』	Retractationes (427)
『聖徒の予定』	De praedestinatione sanctorum (428-29)
『堅忍の賜物』	De dono perseuerantiae (429-30)

アウグスティヌスにおける教育